

伊久間原遺跡公園広場

発掘調査報告書

1995. 11

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

伊久間原遺跡公園広場

1995. 11

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

序

伊久間原遺跡は、昭和27年（1952年）の農道開発事業の実施から発掘調査が本格的に始まり、それ以後土地改良事業や福祉施設の建設事業があるごとに立会調査や発掘が行われて、縄文時代から古墳時代の住居址や多くの貴重な遺構、遺物が検出されて来ました。特に本地域は住居址が400軒余も確認されている大規模な埋蔵文化財包蔵地であります。

今回はその中で果樹園地帯の南西部にあたる一画に、農水省の集落環境整備事業による公園広場「伊久間原縄文の丘 フルーツパーク」を造成したので、埋蔵文化財の確認地であるため、工事前に発掘調査を行いました。本地籍は伊久間原段丘の先端で飯田市街を中心に竜西が一望できる眺望のよい場所で、古代人のロマンと生活が偲ばれます。

調査の結果は縄文時代、古墳時代の住居址4軒、建物址2棟の外、土器等が検出でき、古代の人々の生活の様子を解く上で貴重な資料を得ることができました。

調査に当たっては工事の着工期日が迫っている限られた期間の中で、しかも寒さが厳しい時期に調査団長の佐藤眞信先生をはじめ調査員、作業員、地権者、地元の関係者等多くの方々のご協力で調査が終了出来ました。厚くお礼申し上げます。

平成7年11月

喬木村教育委員会

教育長 城下圭一

例　　言

1. 本書は、平成7年（1995）1月伊久間原遺跡の烟灌水工事の立合調査によるC13地域の、伊久間原公園広場（仮称）の建設計画に伴い、喬木村教育委員が発掘調査を実施した報告書である。
2. 本書は、資料提供に重点をおいて編集したものであり、編集は佐藤が担当した。
3. 遺構実測図作成は佐藤・牧内が、遺物図の作成は佐藤が、製図は田口が分担した。
4. 写真撮影・出土石器一覧表は、佐藤が担当した。
5. 遺構実測図のうち、ピット内の数字は床面からの深さをcmで示し、また遺物出土は床面よりの高さをcmで示し、縮尺は図示してある。
6. 遺物・資料は喬木歴史民族資料館に保管してある。

目 次

| | | |
|------------|-------|----|
| 序 | | 2 |
| 例 言 | | 3 |
| 目 次 | | 4 |
| 挿図目次 | | 4 |
| I 環 境 | | 5 |
| 1. 自然的環境 | | 5 |
| 2. 歴史的環境 | | 6 |
| II 経 過 | | 11 |
| III 調査結果 | | 12 |
| 1. 住居址 | | 12 |
| (1) 繩文時代 | | 12 |
| (2) 古墳時代 | | 15 |
| 2. 建物址 | | 20 |
| 3. 道路址? | | 21 |
| 4. 集 石 | | 21 |
| IV 出土石器一覧表 | | 23 |
| V ま と め | | 24 |
| 図 版 | | 27 |
| 調査組織 | | |

挿 図 目 次

| | | | |
|------|----------------------------------|-------|----|
| 第1図 | 伊久間原と伊久間現在集落地形詳図 | | 7 |
| 第2図 | 伊久間原遺跡位置図及び周辺の主要遺跡図 | | 8 |
| 第3図 | 伊久間原灌漑水工事立会調査遺構確認図I (1 : 25,000) | | 10 |
| 第4図 | 土層断面調査図 (1 : 3) | | 11 |
| 第5図 | 伊久間原公園調査区内遺構分布図 (1 : 3) | | 12 |
| 第6図 | 伊久間原公園4号住居址・道路址?・集石 (1 : 3) | | 13 |
| 第7図 | " 4号住居址出土遺物 (1 : 3) | | 14 |
| 第8図 | " 2号住居址 (1 : 3) | | 15 |
| 第9図 | " 1号住居址 (1 : 3) | | 17 |
| 第10図 | " 1号・2号住居址出土遺物 (1 : 3) | | 16 |
| 第11図 | " 5号住居址 (1 : 3) | | 17 |
| 第12図 | " 5号住居址出土土器 (1 : 3) | | 18 |
| 第13図 | " 5号住居址出土石器 (1 : 3) | | 19 |
| 第14図 | " 建物址 I・II (1 : 3) | | 21 |
| 第15図 | " 道路址?・集石出土遺物 (1 : 3) | | 22 |

I 環 境

1. 自然的環境

伊久間原遺跡は長野県下伊那郡喬木村伊久間原に所在する。

長野県飯田・下伊那地方は東に赤石山脈が連なり、西に木曾山脈が聳え、その中間を天竜川が南下して、その両岸に見事な段丘が発達している。天竜川の東岸 — 竜東地区は背後に赤石山脈の前面の中山性の伊那山脈が大西山(1741m)・鬼面山(1889m)・氏乗山(1818m)・金森山(1702m)となって赤石山脈と並走している。

伊那山脈の東面は急峻な断崖をなすが、西面は数列の断層による起状をもちながら段丘面に達し、天竜川西岸 — 竜西地区に比し山麓からのびる扇状地は狭小で、段丘面の幅員も全般的には狭いが、豊丘村から喬木村にかけての段丘の発達は著しく、特に北から豊丘村の田村原・林原・伴野原、喬木村の城原・帰牛原・伊久間原、さらに飯田市下久堅の中尾・庚申原と続く伊那谷中位段丘の幅は広く、典型的な段丘地形を形成している。

遺跡の所在する伊久間原は、南地1250m、東面150~300m、台地の北側は東西900mと東西方向にのびる北側に傾斜する台地をなしている。段丘面の標高485~510mの広い段丘面をなし、西は緩い段丘崖となって一段低位の下原面となる。南北450m、東西は南側で120m、北にいくに従い三角形の台地形をなし、北側は高く、南にいくに従い低くなり標高470~465mを測る。

北は比高差70m余の急峻な浸触崖となり、崖下を小川川が西流し天竜川に注いでいる。西は伊久間原面で95m・下原面で75mの比高差をもつ段丘崖となり、崖下に伊久間部落が南北に細長く展開し、3~4mの比高差をもって天竜川氾濫原の水田地帯となる。伊久間原面と天竜川の比高差は100m前後であり、天竜川を隔てた竜西面の飯田盆地一帯を望む。

南は境沢の深い浸触谷によって切られ、沢を隔てて飯田市下久堅の中尾・天神・庚申原と続くが、それ以南は小河川の浸触により段丘面は狭小となる。東は約60mの比高差をもつ高位段丘の大原台地、さらに高位の伊那第1段丘の桟山(610m)の残丘があって、その背後九十九谷と呼ばれる深い浸触崖となっている。さらに伊那層よりなる丘陵が東にたかまって続き、この丘陵の東側に断層縫谷によって形成された集落 — 富田・飯田市上久堅があり、その背後に伊那山脈が南北に連なっている。

伊久間原の微地形を見てみると、平坦な台地であるが大原段丘崖下には崖錐堆積の緩傾斜があり、そこは果樹園となっている。この崖錐堆積の端部と伊久間原面は、東に緩く傾斜しており、この交わる線は湧水地帯をなし、南に向かう小流域をなして境沢に合流している。

この合流地点から始まる谷頭浸触は南から北へと進み深い谷を形成し、現在大原段丘へ上の南側道路のすぐ南にまで浸触はせまっているが、人工的処理によって浸触を止めていた一方、人工の加わらない面の観察によれば、下部はミソベタの堅い層、その上に礫層があり、その上に三紀ずらをした粘土層があつて、この堅い層が浸触を食い止めているとみられる。粘土層の上には砂層がのっており、古い時期の流路と見られる。1977年度調査のI調査区のローム層は極めて堅く、おそらく粘土の堆積の流れとロームの堆積が同時期に行われたものと推測される。このため、繩文期造構覆土は堅く調査に苦労した。

伊久間原遺跡は、谷頭浸透の終わる地点を中心とした台地西側に、さらに下原面の北から南端部にかけて各時代の遺構は集中してみられ、出土遺物も多い。

湧水地点の終わる北150m以北は遺構はほとんどみられなくなり、さらに台地北端の東西方向に広がり、北に傾斜する地域（ハマイバ地区）では、縄文後・晩期の遺構の散在が僅かにみられ、出土遺物も少ない。これに反し、湧水地点南は、台地端部の約400mの間に各期遺構の複合・密集がみられており、地形的環境—特に水との関連を強く示すものであった。（第1図）

2. 歴史的環境

伊久間原遺跡の調査は、昭和27年、29年（1952・1954）度に農道開設の際、住居址13軒（縄文中期3、古墳時代10）が調査され、昭和52年（1977）烟灌水工事に先立つ調査で、伊久間原面で住居址16軒（縄文早期末2・中期10・晩期1、弥生後期1）、円形周溝墓2基、土壙13基が、下原面では住居址10軒（縄文中期2・後期3、弥生後期3、中世1、不明1）、方形周溝墓1基、柱列址1、土壙4基等が発掘調査された。

昭和53年（1978）に烟灌水工事が55.7haの伊久間原全面の畠地帯で行われ、配管は果樹園は12m、桑畑・野菜畑は15m間隔に幅30cm、道路に沿った幹線の幅70cm、深さ70cmの溝が掘られるため、工事中の立会調査が実施された。下原面南3分の1は未調査に終わっているが、遺構は一部のみの確認であるが、配管溝の断面と出土遺物からみて、確認された住居址は342軒の膨大な数にのぼった。その内訳は、縄文時代では早期末22、前期1、中期104、後・晩期40、弥生時代中期24、後期68、古墳時代前・中11、後期68、平安時代4である。

昭和63年（1988）に下原面の南端部に社会福祉法人慈生寮の建設が決定、この建設予定地は、伊久間原遺跡群において唯一の未調査区であり、トレンチ調査をなし、平成元年（1989）に発掘調査をなし、その結果、縄文時代早期末、前期後半、中期中葉・後半、後期にわたる住居址39軒、土壙32基、集石炉2基等を発掘し、各期にわたる多くの遺物の出土をみた。（第2図）

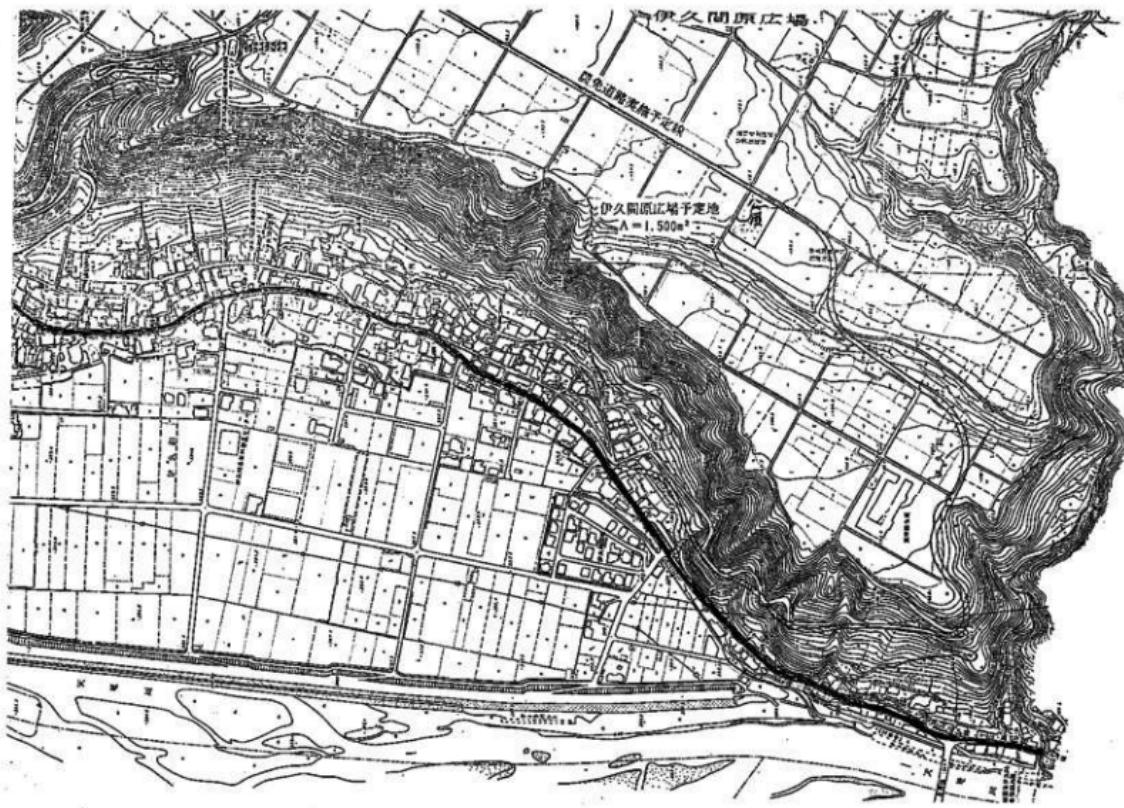
伊久間原周辺の主要遺跡を概観すると、北の同位段丘面にある帰牛原遺跡は、縄文中期後半・弥生後期の集落が発掘され、銅鐵出土が注目されている。さらに段丘西端部には、方形・円形周溝墓9基が発掘調査され、烟灌水工事に伴う立会調査で30基の方形周溝墓の存在が確認され、注目されている。

帰牛原の北に続く同位段丘の城原には、城原城跡があり、さらに北の伴野原遺跡は縄文中期後半の大集落が調査され、パン状炭化物の出土で知られている。

帰牛原下の崖下には、阿島郭遺跡があり、平成4年（1992）老人ホーム喬木荘の建設に伴う発掘調査で住居址17軒（縄文中期後半9、縄文後期7、弥生前期1）、土壙3基を調査した。特に、17号住居址は弥生前期初頭に見る「遠賀川式の壺」の出土がみられ、下伊那地方では豊丘村林里出土の壺と同じであり、下伊那での弥生文化流入の貴重な資料とされている。また郭1号古墳は竜東地区唯一の前方後円墳である。

郭の北、加々須川を越えた天竜川の氾濫原に近い沖積段丘面には、阿島遺跡があり、弥生中期の阿島式土器の標準遺跡として知られている。

伊久間原北の崖下を流れる小川川を越えた低位段丘面には、縄文前期から弥生・古墳時代の遺物の出土は多く、里原・馬場平遺跡があり、特に里原古墳は6基の古墳があり、その主座とみる里原1号墳よりは四神四獸鏡の出土をみている。里原の氾濫原に続く水田址が検出されている。



第1図 伊久間原と伊久間現在集落地形祥図



第2図 伊久間原遺跡位置図及び周辺の主要遺跡図（1:50,000）

- | | | | | |
|--------------|----------|----------|---------|---------------|
| 1 伊久間原遺跡群 | 2 馬場平遺跡 | 3 堀牛原遺跡群 | 4 阿島遺跡 | 5 阿島郭遺跡・郭1号古墳 |
| 6 伴野遺跡 | 7 林原遺跡 | 8 林里遺跡 | 9 田村遺跡 | 10 北原遺跡 |
| 11 恒川遺跡 | 12 霞彩寺古墳 | 13 寺所遺跡 | 14 清水遺跡 | 15 地神遺跡 |
| 16 大原遺跡・富田窯址 | | | | |

天竜川を隔てた対岸の低位段丘面を北からみると、高森町北原遺跡は、弥生中期、北原式土器の標準遺跡であり、座光寺の恒川遺跡群は弥生中期から古墳時代、奈良・平安時代と続く大遺跡であり、伊那郡衛址とみられる重要遺跡として注目されている。

南に続く上郷地区には、下伊那地方最大の前方後円墳雲影寺古墳があり、上郷下位段丘面には弥生時代の注目される遺跡がある。

松尾地区には、弥生中期前半の寺所式土器の標準遺跡があり、南に続く低位段丘面は弥生中期から古墳時代の遺跡がならぶ。

伊久間原の南は境沢を隔てて飯田市下久堅となり、中尾・天神と同位段丘面が続き、一部の調査であるが、縄文中・晩、弥生後期の遺跡が検出されている。東の上位段丘面の大原遺跡では、農業構造改良事業による調査では、縄文早期とみる住居址1、中期中葉末の住居址8軒、集石炉2、土壙5基が発掘され、有舌ボイント1点の出土をみた。また富田窯址の調査では燃焼室が検出されたが、焼成室は開墾時に破壊されていたが、燃焼室には江戸時代中期とみる陶片が散かれ、窯出土の陶器は木灰釉を施すもので、稚器を主体とした江戸時代後期の窯址と確認された。

富田地神遺跡は縄文中期後半・弥生後期・古墳時代から平安期の集落址が発掘されている。

喬木村の富田地区を除く古墳は37基あり、その中、16基は低位段丘面にあり、現存するものは少ないが、消滅古墳を含めてこれら古墳よりは、鏡・玉類・刀剣・金銅製馬具類を含めた馬具の出土は多く、形象埴輪・円筒埴輪の出土をみており、竜東唯一の郭1号墳の存在からみて、竜東地区の古墳文化の中心地であっただろうと推測される。



第3図 伊久間原畠灌水工事立会調査遺構確認図 I (1 : 2,500)

II 経過

平成6年(1994)度事業として、伊久間原遺跡群の南端より約450m北に寄った畠灌水工事の立会調査による、C13地域に伊久間原公園広場(仮称)の建設が決定した。(第3図)

C13地域には立会調査で確認された住居址は14軒あり、公園建設予定地内(28m×52m)の範囲内には12m間隔の配管溝(幅30cm・深さ70cm)中に検出された住居9軒(縄文中期2・古墳時代後期4・平安1・不明2)がある。(第3図参照)

11月、県文化課と、村教委・村建設課と現地をみて話し合い、芝生とする地域の造構は、そのまま残し、建物・その他の施設建設の場所を発掘調査の範囲とすることに決める。

翌1月に建設業者が決まり、調査の運びとなる。1月17日、器材の準備をなし、18日より調査にかかる。

灌水工事立会調査による遺構未発見の道路より西4.5mに南北方向のトレンチを設定、上層断面調査をなす。(第4図)

19日に重機により調査区域を中心に範囲を広げ、表土の排除をなす。立会調査時に検出した道路に接するC55号(伊・公1号住とする)の調査にかかり、また、C55号とC54号住居址の間に小型の円形となる伊・公2号住居址を検出する。

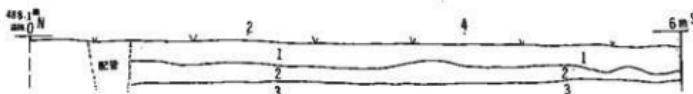
20日以後、立会調査検出の住居址の調査をすすめるが、作業員が少なく調査は進まず、苦労する。C54号(伊・公3号住)・C53号(伊・公4号住)は上層では、はっきり黒土の落ちこみがみられるが、C54号の床面は平坦で穴ではなく、南北方向に続き、西側には溝が掘りこまれており、住居址とはみられず、道路址ともみられるがはっきり確認はできず、また、表土より87cmと深い掘りこみで北は農道で調査できず、南に続くとみるが未調査に終わる。

C53号(伊・公4住)は、縄文中期初頭の住居址となる。

北境より南10m、中央道路より西8mに、C51号(伊・公5住)が、はっきりと住居址の区画を示す黒土の落ちこみがあり、調査区外であるが、掘りこみが浅いとみられ、調査する。古墳時代後期前半の住居址で、造構は完全近く検出され、遺物は本次調査で最も多く、整った土器の出土をみた。

立会調査では検出されなかった掘立柱の建物址2棟が検出され、1月28日に現地調査を終了した。

その後、遺物の整理・復元、実測作業、図面・写真の整理などを行い、報告書の作成にかかる。



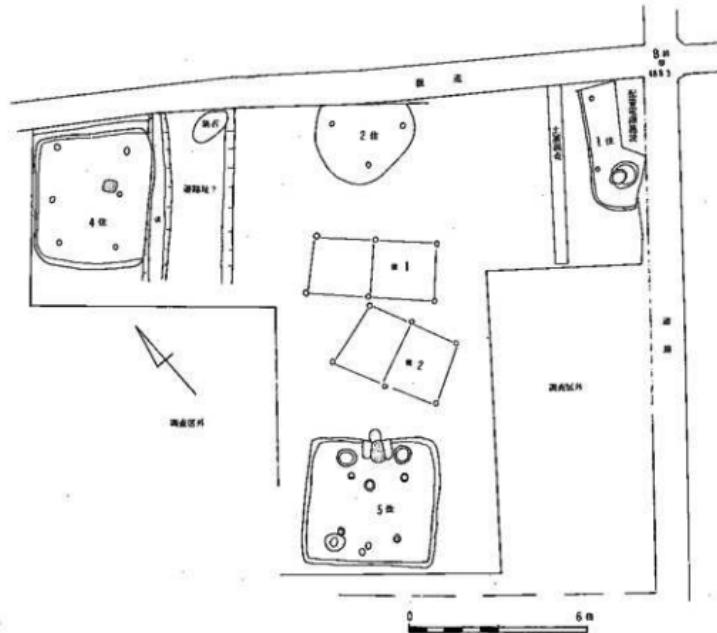
(1…暗褐色土、2…暗黄褐色土、3…ローム)

第4図 土層断面調査図

III 調査結果

今次、伊久間原遺跡公園広場建設設計画に伴い、発掘調査された遺構は、次のようにある。(第5図)

- (1) 住居址 4軒 — 繩文時代中期初頭1, 中期後半1, 古墳時代後期2
- (2) 建物址 2棟
- (3) 道路址 ?, 集石 1



第5図 伊久間原公園調査区内遺構分布図

(I) 遺構・遺物

1. 住居址

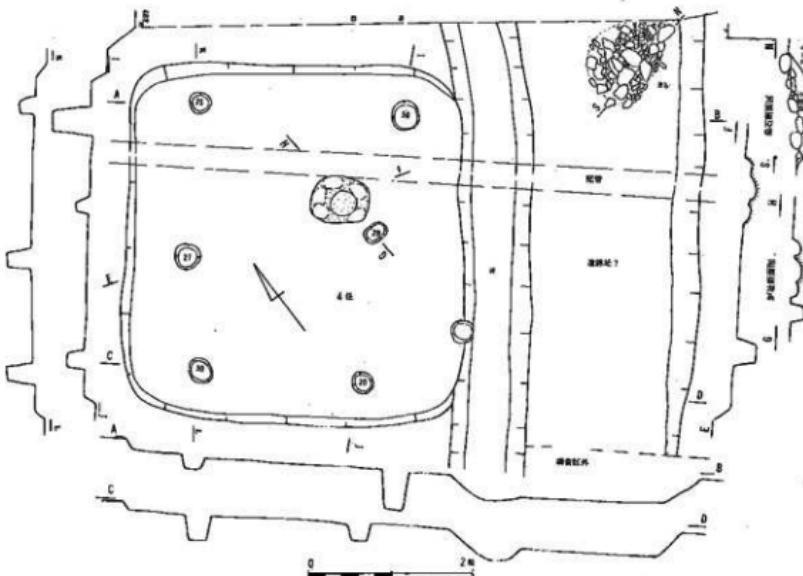
- (1) 繩文時代

伊久間原公園4号住居址（第6図）

農免道路より北側の農道を西へ17mはいった道に接して南にあり、東側は道路址かとみる遺構に壁は切られている。

南北4.3m×東西推定4.2mの隅丸長方形をなし、ローム層に深さ15~20cm掘りこむ竪穴住居址である。柱穴は東西に3個ずつ計7個があるが、主柱穴は6個または7個ともみられ、南東側の壁を切られた所に柱穴の痕跡がみられている。炉に接する柱穴は割木を用いられている。

炉址は中心よりやや北東によってあり、東西68cm・南北55cmの楕円形をなし、石圓炉であったとみられる石を抜いた痕跡が5個並んでみられる。炉内部の焼土は著しい。

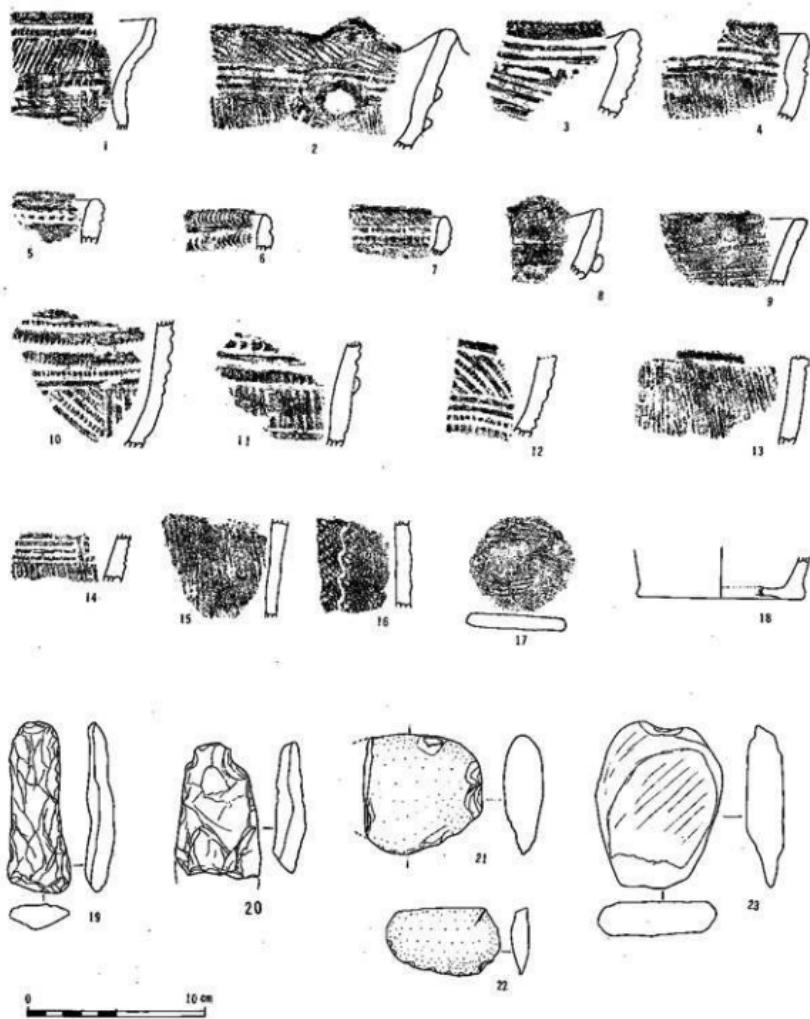


第6図 伊久間原公園4号住居址、道路址？、集石

遺物（第7図） 出土した土器は破片のみであり、縄文時代中期初頭の土器である。

土器は、半截竹管による平行・斜行沈線に連続爪形文をもつ隆線文で口縁部は施文し、大きく外反する。1・10~12と口縁部の一部を残す5~7の1群。2は口縁部に小さな突手が付けられ、平縁となる。口唇から口縁上部は斜繩文がつき、次いで3条の半截竹管による横位沈線がめぐり、突手下には粘土紐による繩文を施す輪状の突起がつく。横位沈線下は半截竹管の縦の条線を密に下げている。4も同系と同系であり、8は口縁部に小さな突手をもち、突手下に粘土紐の穴のあく突帯がつき、下は繩文となる小片ではっきりしないが2と同系のものとみられる。

3は折返し口縁をなし、口縁部はゆるいカーブがみられ、小突手をもつとみる。口唇に浅い爪形文があり、その下は深い横位の半截竹管文が続いてみられるが、4・5条の右側は幅がやや広くなり、短い突刺文が3個。左側に同様の刺突文が1個みられるが、ともに欠落して不明となる。胎土に雲母粒が多くみられる。9は口縁上部は無文、下に細線の格子文がつく。3・9は、この2点のみが異なる文様をなしている。



第7図 伊久間原公園4号住居址出土遺物

脇部には、13・15～17があり、16は斜行縄文に継のS字状結節をともなうもので、無文帯をはさんで文様が交互に付けられているものである。13・15は半截竹管の縁の細い沈線を下すもので、13にみる横位沈線は口縁部と境する沈線とみる。17は浅く、短い短線文が斜・横に不規則に施され、半截竹管か樹状具によるかはっきりしない。径5.5cmの土製円板である。

底部18は下底が強く外反している。

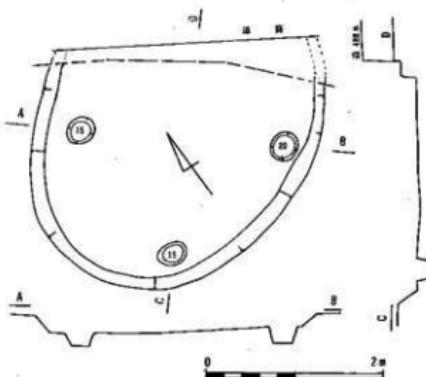
石器には、19～23が床面から出土をみ、19・20の打製石斧、21・22の横刀形石器、23の石鍤がある。道路址とみる東側の造構より多くの石器の出土をみているが、東壁を切った際に、本住居址の土器とみる破片数点と、比較的多い石器の出土をみている。

伊久間原公園2号住居址（第8図）

農免道路より農道を西8mはいった位置にあり、配管立会調査では検出されなかった住居址である。2分の1近くは農道にはいっており、調査不能。東西3.2m、南北は不明であるが、北にのびる精円形をなす竪穴住居址である。道より深さ40cmでローメ層となり、暗褐色土を20cm掘りこみ、床面は平坦で堅いが、部分的に荒れが見られる。柱穴は3個検出されているが、配置からみて、主柱穴は5～6個とみる。炉址は道路下となり調査不能であるが、住居址中心より北東によってあるとみる。

遺物（第10図） 遺物の出土は僅少。

土器片は縄文を施す16・17、無文18の3点であり、石器は19・20の石鍤2個、21・22の横刀形石器2個である。土器からみて縄文中期後半であり、この期の住居址とみる。



第8図 伊久間原公園2号住居址

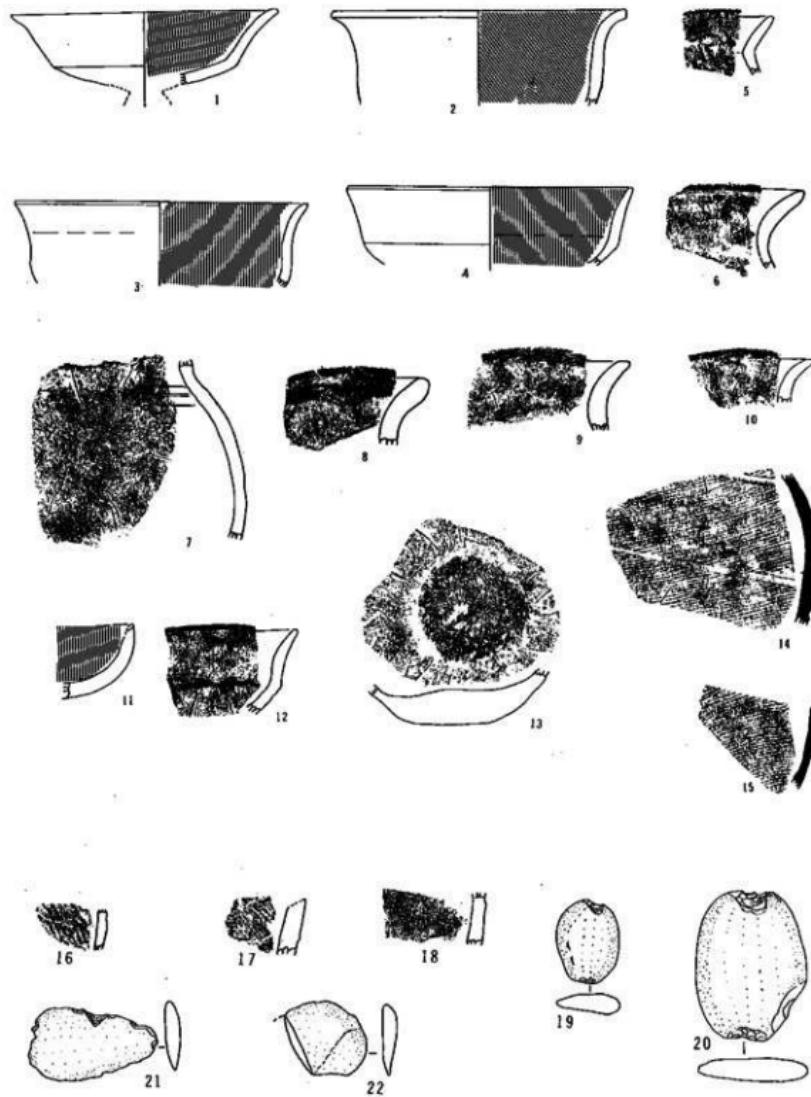
(2) 古墳時代

伊久間原公園1号住居址（第9図）

東は農免道路に、北は西に入る農道とにかく、配管立会調査検出のC55号住居址である。灌水配管電源施設が東側にあり、調査できたのは4分の1程度である。ほぼ中央部を約50cm幅に東西方向に配管が切っている。

地表より55cmで床面となり面は堅い。西側壁に接して南北に2個の主柱穴とみる穴がある。南側壁より45cm、西壁より65cmに東西100cm・南北85cm、深さ20cmの精円形の掘りこみがあり、西縁に沿って深さ60cm、径45cmの穴があり、穴の西側に長さ50cm、幅10cm前後の焼木が付着している。精円掘りこみ内より、楕片2点と杯片1点を、また残る床面より比較的多くの土器の出土をみている。

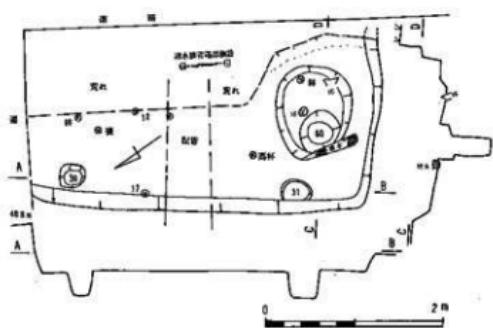
遺物（第10図） 古墳時代後期の土器と須恵器2点がある。1の高杯は脚台を欠く。表面は赤褐色、内黒である。2・3は脇下部を欠くが鉢形で内黒。2の表面は淡褐色、胎土に雲母粒を多く含む。3の表



(1~15…1号住居、16~22…2号住居)

0 10cm

第10図 伊久間原公園1号・2号住居址遺物



第9図 伊久間原公園1号住居址

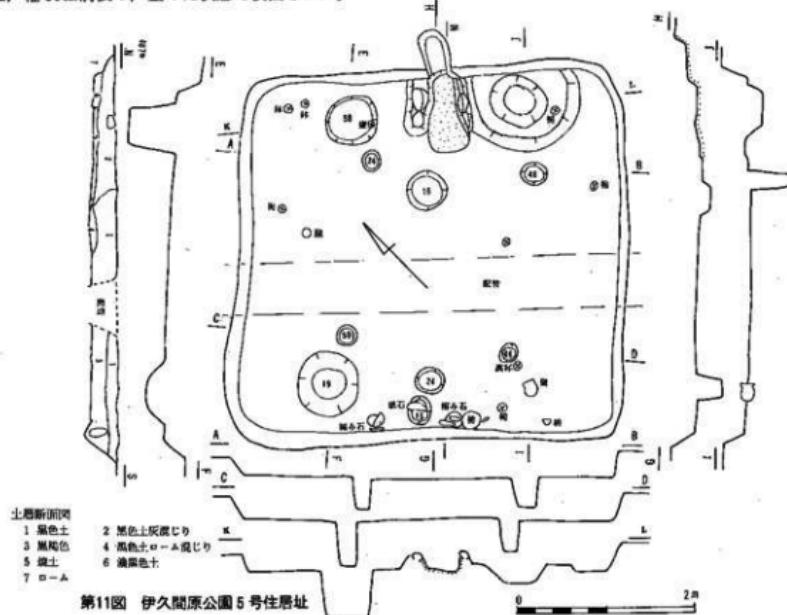
面は赤褐色なで整形が施されている。4は底部を欠くが、杯とみる内黒である。5～8は壺、5・6・8・9は口縁片。7は胴上部片であり、大型甕とみられる。

10・11は杯とみられ、12は碗とみる。13の底部は厚い底をなし、壺の底部ともみるが、不明。14・15は須恵器片で、斜の叩き文がつき、内面はなでの整形が施されている。

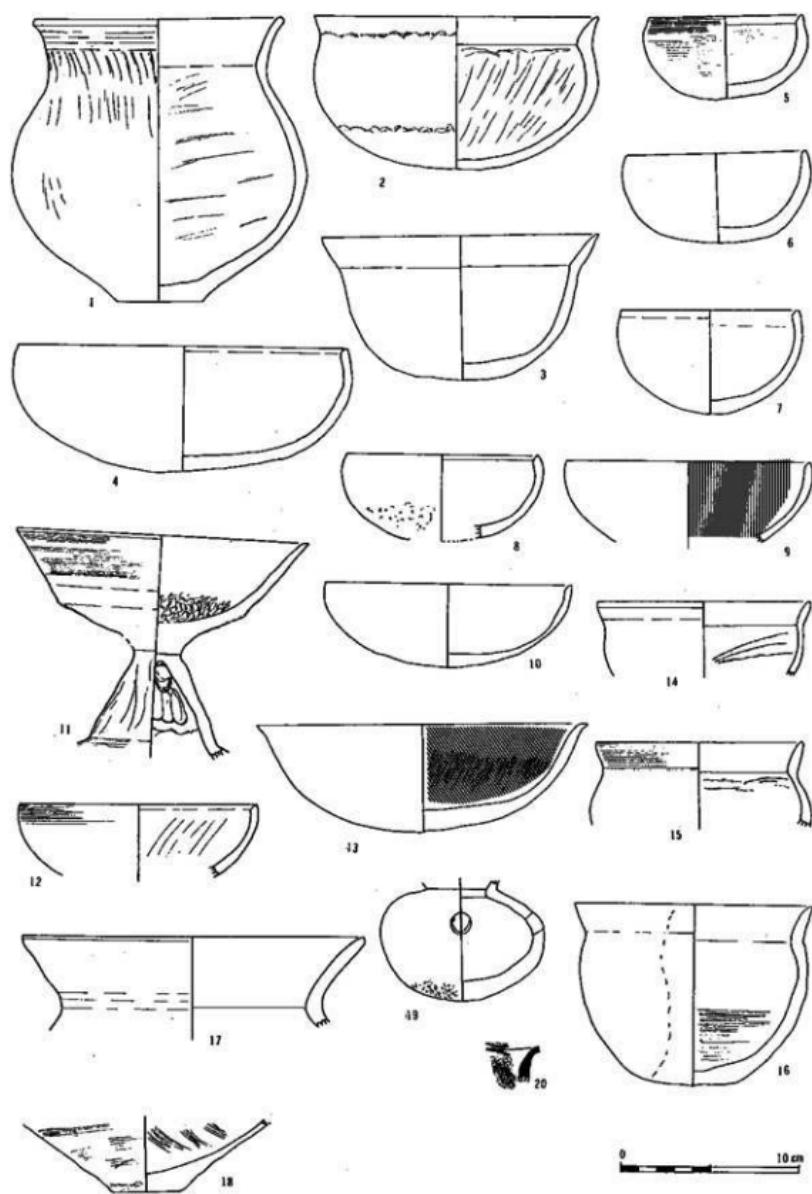
伊久間原公園5号住居址（第11図）

配管立会調査のC51号住居址であり、住居址のはば中央を60cm幅、東西に切っている。農免道路より西7m、農道より11.5mにあり、南北4.2m×東西4.35mの隅丸方形、深さ25～30cmローム層に掘りこむ竪穴住居址である。覆土は断面図にみるように変化が多い。

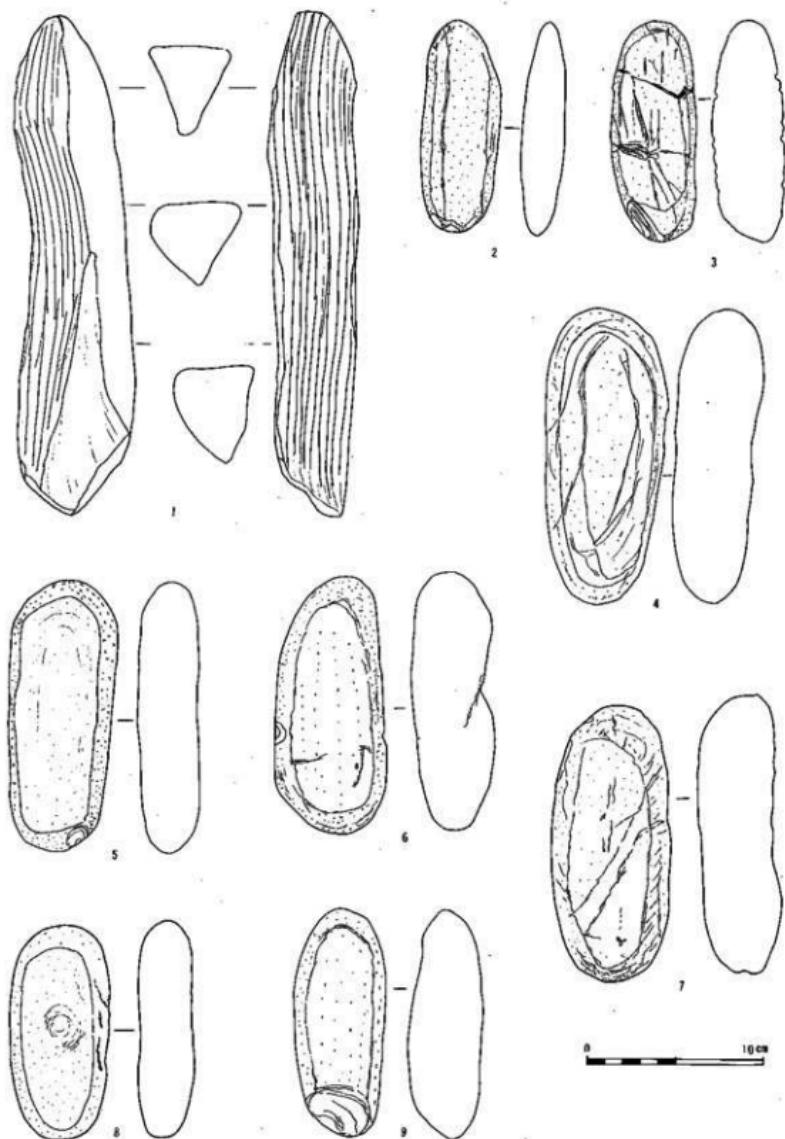
主柱穴は4個、カマドは北壁中央に着いており、大きな川原石を両側に2個ずつ掘えてあるが、粘土カマドとみた。天井は崩れてなく、火床は焼土を全面にもち、焼けは著しい。煙道は北壁の外に長さ50cm、幅30cm前後の、整った状態で検出された。



第11図 伊久間原公園5号住居址



第12図 伊久間原公園 5号住居址出土土器



第13図 伊久間原公園 5号住居出土石器

カマドの両側には、大きな穴がつき、東側のは穴の状態からみて灰溜、西側は大きさ、穴の深さからみて貯藏穴ともみられる。カマド前に浅い径40cmの穴があり、また、南壁中央部に接し柱穴ともみる穴2個が並び、その周辺には、土器の出土は多く、編み石8個・長大の砥石1個が壁に接して出土をみた。これらの出土をみた西側に径70cm、深さ19cmの浅い大きな穴が掘りこまれている。

遺物は多く、

- (1) 土器（第12図）は土師器が占めており、覆土中より須恵器小片1点の出土をみる。
- (1) 壺（1・15・17）があり、1は完形で、高さ16cm・口径14.2cm、口縁部は内外とも黒色、胴部は暗褐色、刷毛整形が施されている。15は胴下半部を欠く、小型で口縁部は刷毛整形。17は大型壺で口縁部のみ残す。
- (2) 鉢（2・3・16）2・3は椀ともみられるが、大きさ、器形からみて鉢とした。頭部はくびれ、口縁部は外反し丸底をなす。2は口径15.5cm・高さ8cm、3は口径16cm・高さ8.6cmを計る。16は壺ともみるが器形から鉢とした。2分の1近くを欠く。口径13.5cm・高さ10cm丸底をなす。
- (3) 梗（4～10・12・3）があり、小型に5～8、中型に9・10・12、大型4・13がある。口縁の外反する12以外は内湾する。9・13は内面黒色である。
- (4) 高杯（11）1個の出土をみる。杯部口縁径16.5cm、杯外面は刷毛整形、内部の上段部は刷毛整形が僅かにみられるが、底部にはヒビレがはいっている。脚の開きを欠くが、残存高さ12.5cm。杯下部には僅かに梗がみられるが明瞭ではない。胎土は砂を含むが、精選されている。
- (5) 杯（18）平底で大きく外に開くが口縁を欠き不明であり、一応杯とみた。
- (6) 魁（19）口縁部を欠くが胴部は完形である。胴部中心径9.2cm、丸底で穴は胴のやや上部につき、径1.1cmを計る。
- (7) 須恵器片（20）口縁部を僅かに残し、細い波状文が施されている。
- (II) 石器（第13図）南壁中央部に接して砥石1個、編み石8個の出土をみる。
- 1の砥石はフロンフェルス製、長さ28cm、不規則な三角形をなし、研ぎ面は三角形の平面を使用しており、その幅5cm前後であり、使用痕は著しい。
- 編み石は2～9があり、糸を編む石で、梢円形の丸味をもち、中央部に僅かな凹みをもつ石を用いている。（編み縄をまくに都合がよい）最大は長さ16.5cm・重量840g、最小は12cm・重さ220gと大小不同であり、その平均値は長さ13.9cm・重さ533gをはかる。材質は、2がフロンフェルスで、他は硬砂製である。

2. 建物址 I・II（第14図）

建物址Iは、2号住居址の南東1.9mにあり、建物址IIは、5号住居址の北東1.2mにある。

建Iは、南北4.1m×東西1.8mの2間×1間の建物址で、主軸方向N42°Eを示す。

建IIは、南北は東側3.35m、西側で3.56m×東西2.2mの2間×1間の建物址であるが、南北は東と西で20cmのずれがみられる。主軸方向N60°Eを示す。

I・IIとともに接しあって、僅かに方向を異にするが同時に建てられたともみられ、遺物の出土をみなかつたが、周囲の住居址の状態からみて古墳時代後期の貯蔵用の建物址とみたい。

3. 道路址? (第6図)

西は4号住居址の東壁を切り、北は農道にかかり、調査不能であるが北に延びる。南は調査区外となり、一部溝部分を少し入りこんで調査した。北東隅には後に作られた集石があり、この部分の掘りこみ幅は少し広くなっていた。上部(ローム層)よりの掘りこみ幅は、北側で2.95m、南側で2.7mでやや狭まる。直線的に掘られているが、4号住の北東端から北に僅かに西へカーブがみられる。

ローム層を30cm前後掘りこみ、その底部は平坦で堅くしまっており、幅1.7m前後が北から南へと続く。底部面に4号住の東壁を切った下までに、深さ10~20cm、上部幅60~70cmの溝が、内側に湾曲して掘られている。

幅1.7mの固い平坦面、それにつく溝の形態は道路址とみたい。

遺物(第15図1~19) 土器は小片1~6の6点が溝の中より出土しており、4号住の壁を切った時に落ちたもので、縄文中期初頭の土器である。

石器は覆土出土が多く、7~19があり、打石斧は7~12の6個、7~11は完形、12は基部を欠くが幅広の大型である。13の石錐・14~18の横刀形石器は、いずれも縄文時代中期に多くみる形態である。19は頭部を欠いているが、石棒とみられるがはっきりしない。

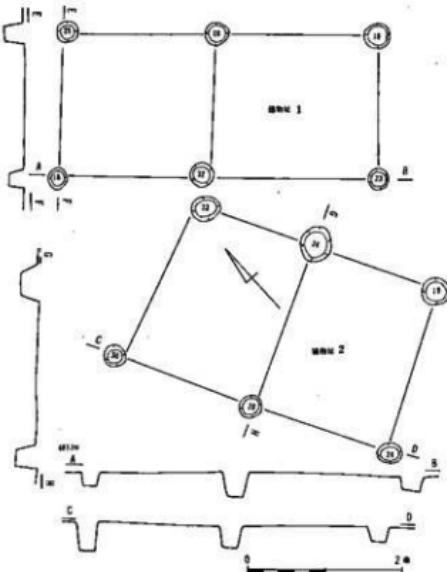
4号住の出土石器は打石斧2・横刀形石器2・石錐1の計5個の出土であり、住居址からみて少なすぎると思われる。道路址?の覆土から床にかけて出土した石器の一部は4号住のものと思われ、また他からの投げこみも多かったとみる。

4. 集石 (第6図)

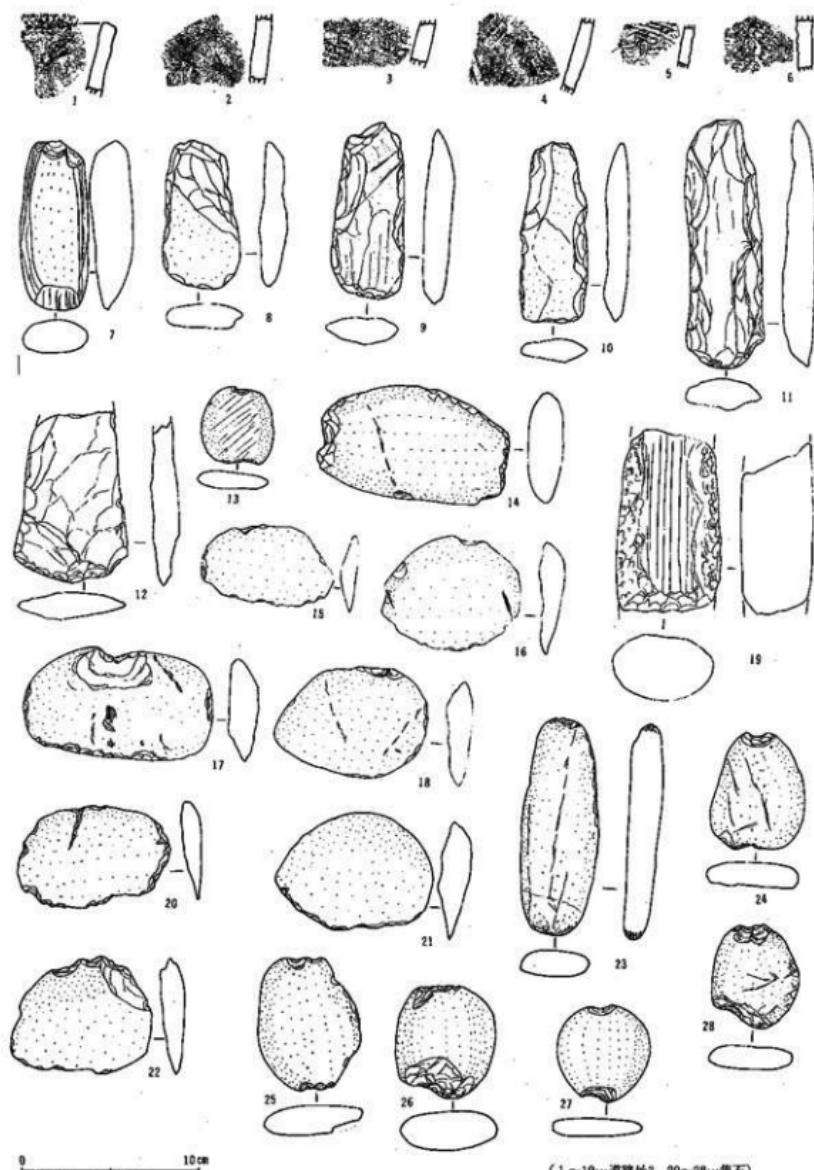
道路址かとみる第6図の北東隅に南北1.25m×東西0.85mの楕円形の範囲に不規則に、小石から人頭大の石を敷きならべた状態のものである。道路址?の底部を礫か20cm前後掘り凹め、大きな石は1段、小さい石は2~3段に並べただけで、下は褐色土でロームとなる。

上層に石器第15図20~28が散らばれる状態で出土をみた。20~22は横刀形石器、23は敲打器。24~28は石錐がある。いずれも完形で、意図的に入れたものか不明。集石が土壤かと最初はみたが、その痕跡はみられなかった。

畑の開墾の際に、出土した石をまとめたものとも思われ、また、石錐の欠けが多くみられ不用品の捨て所ともみられた。



第14図 伊久間原公園建物址 I・II



第15図 道路址?・集石出土遺物

IV 伊久間原公園発掘調査出土石器一覧表

| 遺構 | 図番号 | No. | 器種 | 材質 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 重量(g) | 備考 |
|------|-----|-----|-------|---------|--------|-------|-------|-------------|
| 4住 | 7 | 19 | 打石斧 | 凝灰岩 | 9.5 | 3.5 | 71 | (縄文中期初頭) |
| " | " | 20 | " | 硬砂岩 | 7.5 | 4.8 | 63 | 刃部折れ |
| " | " | 21 | 横刀形石器 | " | 6.5 | 6.5 | 150 | 側面欠け |
| " | " | 22 | " | " | 4.0 | 7.5 | 35 | |
| " | " | 23 | 石錐 | 砂岩 | 9.1 | 7.6 | 192 | |
| 2住 | | 4 | 石錐 | 硬砂岩 | 4.8 | 3.6 | 20 | (縄文中期後半) |
| " | | 5 | " | " | 8.2 | 6.2 | 120 | |
| " | | 6 | 横刀形石器 | " | 4.0 | 4.5 | 20 | 側面欠け |
| " | | 7 | " | " | 4.0 | 7.4 | 34 | |
| 5住 | 13 | 1 | 砥石 | フロンフェルス | 28.0 | 4.7 | 1050 | (古墳時代中期) |
| " | " | 2 | 編み石 | " | 12.0 | 4.5 | 220 | |
| " | " | 3 | " | 硬砂岩 | 12.4 | 4.7 | 360 | |
| " | " | 4 | " | " | 16.5 | 6.7 | 840 | |
| " | " | 5 | " | " | 15.2 | 5.6 | 558 | |
| " | " | 6 | " | " | 14.5 | 6.0 | 680 | |
| " | " | 7 | " | " | 15.2 | 6.6 | 780 | |
| " | " | 8 | " | " | 12.1 | 5.6 | 375 | |
| " | " | 9 | " | " | 12.8 | 6.0 | 450 | |
| 道路跡? | 15 | 7 | 磨石斧 | 輝緑岩 | 9.7 | 3.7 | 170 | |
| " | " | 8 | 打石斧 | 硬砂岩 | 8.2 | 4.5 | 68 | |
| " | " | 9 | " | 凝灰岩 | 9.7 | 4.0 | 100 | |
| " | " | 10 | " | 硬砂岩 | 10.0 | 3.7 | 68 | |
| " | " | 11 | " | 凝灰岩 | 14.0 | 4.4 | 180 | |
| " | " | 12 | " | 硬砂岩 | 9.0 | 6.0 | 124 | 基部を欠く |
| " | " | 13 | 石錐 | 輝緑岩 | 4.3 | 4.0 | 30 | |
| " | " | 14 | " | 硬砂岩 | 10.6 | 6.2 | 210 | |
| " | " | 15 | 横刀形石器 | " | 4.4 | 7.2 | 40 | |
| " | " | 16 | " | " | 6.4 | 7.7 | 85 | |
| " | " | 17 | " | " | 5.6 | 10.6 | 153 | |
| " | " | 18 | " | " | 6.0 | 8.2 | 90 | |
| " | " | 19 | 石棒? | 凝灰岩 | 10.0 | 6.7 | 440 | 両端を欠く 表裏面磨く |
| 集石 | " | 20 | 横刀形石器 | 硬砂岩 | 5.5 | 8.5 | 70 | |
| " | " | 21 | " | " | 6.5 | 8.6 | 102 | |
| " | " | 22 | " | " | 6.4 | 7.8 | 73 | |
| " | " | 23 | 敲打器 | " | 12.0 | 3.9 | 154 | |
| " | " | 24 | 石錐 | " | 6.5 | 5.2 | 86 | |
| " | " | 25 | " | 凝灰岩 | 7.4 | 5.5 | 115 | |
| " | " | 26 | " | 硬砂岩 | 6.3 | 5.5 | 121 | |
| " | " | 27 | " | " | 5.4 | 5.1 | 46 | |
| " | " | 28 | " | " | 5.8 | 4.8 | 60 | |

IV まとめ

伊久間原は戦前から石鎚（やじり）が多く拾える所と知られていた。

伊久間原での遺跡調査は、昭和27年・29年（1952・1954）に農道開発事業がはじまり、住居址の発見で調査が本格的に始められたのが最初である。この時縄文中期後半住居址3軒、古墳時代後期住居址10軒が検出調査された。（注1）

昭和53年（1978）度に畑灌水工事が実施されることが決定し、これに先立ち、遺構を知るため、調査可能地域3か所の2,700m²について発掘調査が決定し、昭和52年（1977）8月から翌53年2月まで調査を実施した。その結果住居址26軒、（縄文時代早期末2・中期中葉3・中期後半9・後期2・晚期1、弥生時代後期6、中世1、不明1）建物址2棟、方形周溝墓1基、円形周溝墓2基、土壙17基が発掘調査された。（注2）

昭和53年（1978）畑灌水工事が伊久間原全面の55.7haに行われることになり、果樹園は12m、桑畠・野菜畠は15m間隔に配管が施され、道路上に沿って幅70cm余の幹線が、一般配管は幅30cm、いずれも深さ70cm以上の溝が掘りこまれ、この中に給水管が埋められる。この溝の中に入っている溝壁の断面、底を調べ、ローム層に黒色土・暗褐色土等の掘りこみによって住居址や、遺構の存在を知り、異物の出土によって遺構の時代などを決める立会調査である。

立会調査は、昭和53年（1978）10月から翌54年2月末まで行われ、その結果を集計すると、住居址344軒、その内訳は次のようにある。

縄文時代 早期末21、前期2、中期中葉27、中期後半71、後・晚期40 ……計168軒

弥生時代 前期？、中期24、後期68 ……計92軒

古墳時代 前・中期11、後期69 ……計80軒

平安時代 4軒

土 壤 縄文時代8、弥生時代3、不明4 ……計15基

方形周溝墓 1基

溝 址 中世4

以上立会調査によって遺構数の多さだけでなく、各時期の住居址の立地にも多少の違いもみられ、特に湧水地帯を離れた北にいくにしたがい数が減少し、皆無となる。また大原段丘崖下の崖堆積の不安定地帯を避けている。（注3）

平成元年（1989）社会福祉法人悠生寮建設に伴う調査が、伊久間原下原面の南西部（立会調査未了地）に9月～11月に実施され、遺構は多く、出土遺物も多く、良い資料を得られた。

検出された住居址38軒（縄文時代早期末5、前期後半2、前期とみる13、中期中葉2、後半3、後期3、不明13）、土壙33基、集石炉2基、建物址1棟、方形周溝墓1基が調査された。

立会調査検出住居址に、昭和27年（1952）以後、平成元年（1989）までの発掘調査検出住居址は419軒が確認されることになる。（注4）

今次公園広場建設用地は、立会調査のC13地区にあり、確認された住居址は14軒である。建設区域はC13地区の北側の、東は農免道路、北は農道に区切られる北側の南北29m×東西52mの1,500m²範囲で

ある。12m間隔の配管溝に検出住居址 9軒がある。

しかし達構保存のため芝生地に調査区外とし、建物等の建設場所を重点をおいた。また上層の土を排除したあとに覆土の浅い破壊のおそれのある住居址は、調査することとした。

調査された住居址は、立会調査検出のC55住、C53住、C51住の3軒で、C54住とみたのは道路址?とみると変わった。これら検出住居址は、整理上C55住は伊公1号住、C53住は伊公4号、C51住は伊公5号住居址とした。立会調査からはずれた新住居址に伊公2号住がある。立会調査検出住居址は、調査時と同位置に検出され、調査区外としたC50住、C52住も表土排土あとに、住居址の輪郭を表してみられた。この結果からみて、立会調査検出遺構に大きな違いはないと思われた。

調査された住居址の時期は、縄文中期初頭1、中期後半1、古墳時代中期1、後期1がある。

縄文中期初頭住居址は隅長方形をなし、出土土器は半截竹管による平行・斜行沈線に連続爪形文をもつ隆線文で口縁部を施し、大きく外反する1群と口縁部に小さな突手が付き、平縁となり、口唇から口縁上部は斜繩文がつき、次いで3条の半截竹管による横位沈線がめぐり、下には半截竹管の縦の条線を密に下げている1群が主な文様構成である。口縁は大きく外反し広がりをみる。胴部の文様は省略され、直に底部に下り底部はやや広がる器形をなす。

縄文中期後半の2号住は、2分の1調査で土器も僅か小片をみるのみ、石器も僅かである。

古墳時代中期とみる伊公5号住は、整った形態をなし、中央を東西に配管が通るが、大きな変化はない。出土土器は多く、甕・鉢・碗の完形があり、杯・甕・高杯等整った形で出土した。鉢は挽形ともみられるが、器形からみて鉢とした。器形は頸部がくびれ、口縁部は外反し、丸底をなし、口径15.5cm~16cm、高さ8cm~8.6cmの大型である。甕は口縁を欠く。

石器には、大型砥石1個があり、長さ28cm、重量1050g、不規則な断面は三角形をなし、砥面は平坦面を使用し、長く使用されたとみる。編み石8個が括出土し、糸を編む石であり、精円形の中央に僅かな凹みをもち、編み糸を巻くに都合の良いものを選んでいるとみる。大きさは大小あり、長さ16.5cm~12cm、重量840g~220gと差がある。この様にまとまって出土をみる例は、この地方では希である。

古墳時代後期住居址伊公1号は、東側は道路にかかり、これより西には給水配管電源施設があり、荒れており、4分の1程度の調査であった。

主柱穴は西壁に接し、南北に2個があり、西壁と南壁より少し入って大きな穴が掘られ、カマドの灰出し穴とみられ、内部より鉢片1、鉢片2点の出土をみ、穴の西縁に焼木が横に据っていた。

出土土師器には完形ではなく、内面黒色土器の出土が多い。高杯は脚部を欠き、内面黒色、鉢部2点は胴下部を欠き内面黒色。杯1点は、底部を欠き内面黒色である。その他甕片・碗片・杯片等数点がある。

須恵器甕胴部片2点の出土をみ、斜行叩き文がつき、裏面はなで整形が施されている。

道路址?は、はじめC54号住で伊公3号住として調査した。ローム層に掘りこむ幅は、上部で2.7cm~2.9cm、底部は平坦で固くしまり、幅1.7m~1.8m、その西側に5号住の東壁を切った下まで続き、幅60cm~70cm・深さ10cm~20cmの溝が内に湾曲して掘られている。柱穴はみられず、北東隅に後に作られたかとみる集石がある。調査したのは南北長さ5.1m、溝は5.4m余を調査、南に長く続くとみられ、南側

配管立会調査での検出住居址に、道路址？とみるより直線的に並ぶのがみられるが、調査によらなければ、道路址と決定できない。

また、時期的に、これに伴う遺物はみられず、道路址？北東20mにある中世伊久間原城跡につながればとみるが、C6・C10調査地に直線につながる住居址3軒列と6軒列が配管上にみられる。今後の解明すべき課題である。

以上、伊久間原遺跡の一端と、遺跡全体について記してきたが、遺跡のもつ重要さと、その保存については今後の開発の進め方に関わる問題であり、後に悔いを残さぬ対策が望まれる。

今次調査は、多くの課題を残すものであり、多くの誤りもあると思われ、大方のご批判・ご教示をお願いいたしたい。

おわりに、今次調査にあたって厳寒のさ中作業にあられた方々のお骨折りがあり、工事を請負われた吉川建設工業の営業主任、松沢進さんのご協力に、あつく感謝いたしたい。

(佐藤姓信)

注1 大沢一夫・今村善興「長野県下伊那郡喬木村伊久間原住居址」信濃4, 12

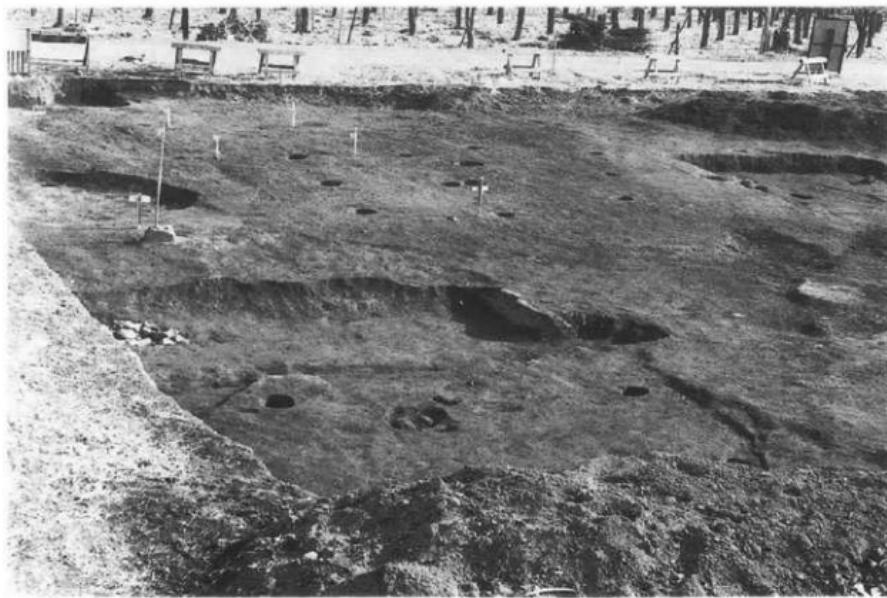
注2 喬木村教育委員会「伊久間原」1978

注3 " 「伊久間原II」1980

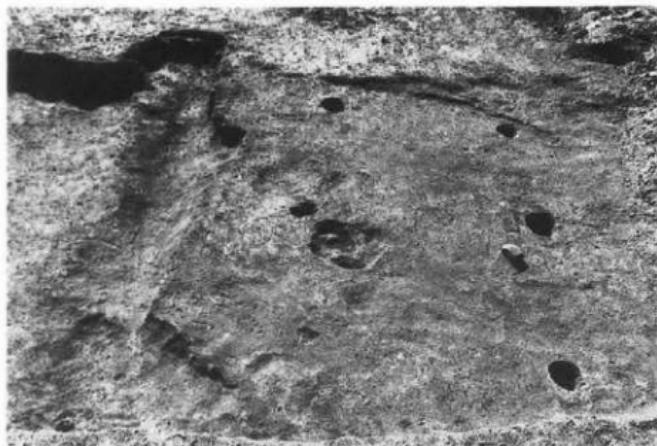
注4 " 「伊久間原遺跡下原」1991



伊久間原遺跡公園建設用地



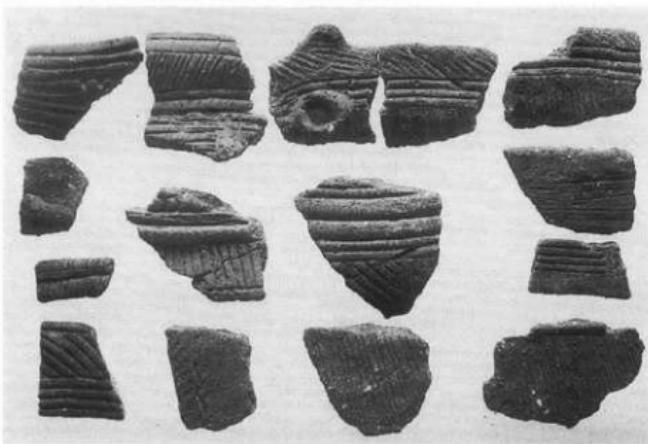
伊久間原遺跡公園発掘調査遺構全景



4号住居址
(縄文中期初頭)

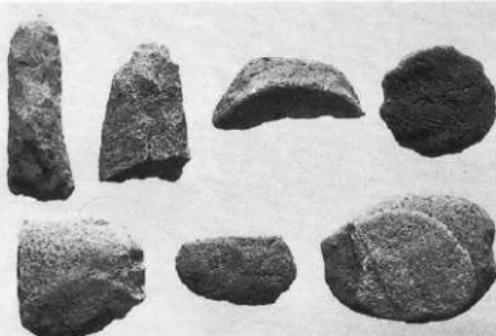
左側は道路址?
の溝で切られる

4号住居址
出土土器



4号住居址出土遺物(2)

右上…土製円盤、
他は石器



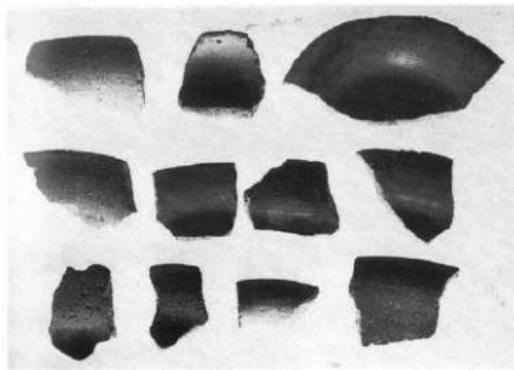
2号住居址
(縄文中期後半)

北側は農道のため
2分の1は調査不可

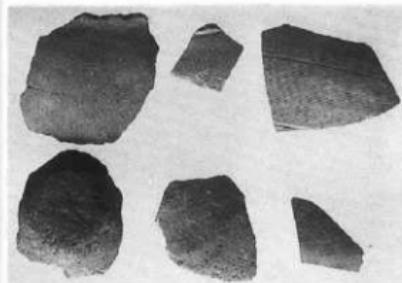


1号住居址
(古墳時代後期)

右側は道路と、
給水配電施設のため
4分の1の調査



1号住居址出土土師器(1)



1号住居址出土遺物
(左2個と下中…土師器壺片、左下…底部、
上中・右・右下…須恵器)



5号住居址
(古墳時代
後期初め)



5号住居址
カマド



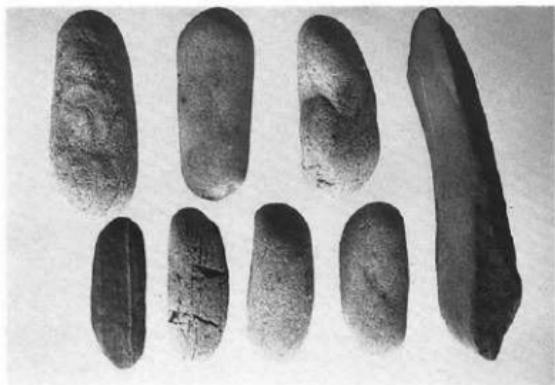
5号住居址
竈出土



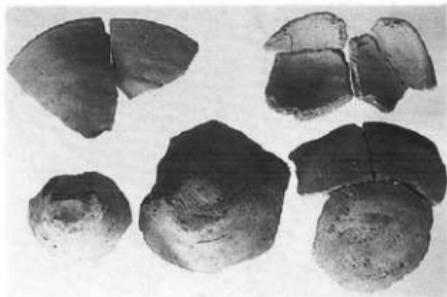
5号住居址出土
土師器
(中…甌。
両側…椀)



5号住居址出土
土師器
(右…甌。
左・中…鉢)



5号住居址出土石器
(右…砥石。他は緼み石)



5号住居址出土土師器
(左上下…高杯片。上…杯。下脚部片。
中…杯片。右上…手づくね土器片。
下…椀片)

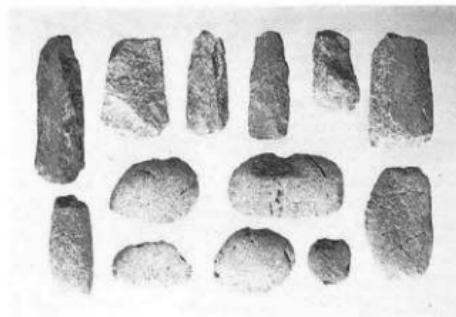
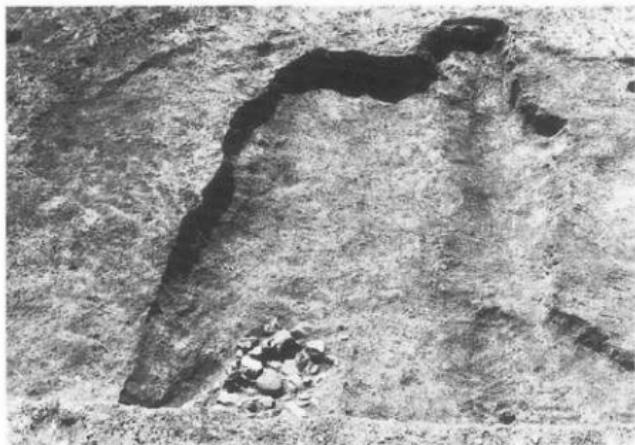


据立柱
建物址 I・II号

(左…I号、右…II号)

道路址?

(右侧は4号住居址を
切り、下は溝がのびる。
右の道とみる面上の上は
調査区外でやめる。
左下は集石。)



道路址?出土石器



集石出土石器

(右端…敲打器、上段…石錘、下…横刃形石器)



伊久間原遺跡公園完成風景（東から）



伊久間原遺跡公園完成風景（西から）

遺跡公園より
天竜川対岸風景（1）

飯田市街をのぞむ





遺跡公園より天竜川対岸風景（II）飯田市 上郷・座光寺をのぞむ

発掘
スナップ



発掘
スナップ



調査組織

1. 伊久間原遺跡公園調査委員会

鈴川英人 喬木村教育委員会委員長
城下圭一 喬木村教育長
桐生文雄 喬木村教育委員
東原美寅 "
小池吉朗 "
原五郎 喬木村文化財保護委員会委員長
黒川良一 喬木村歴史民俗資料館館長

2. 調査団

團長 佐藤 駿信
調査員 牧内住子
調査補助員 田口 さなゑ

3. 作業員

黒川良一 原 義顯 北沢留雄 大原久和
大原明子 小池ふみゑ 吉川弥生 柳沢八重子
下岡重尊 佐藤いなえ

4. 指導

長野県教育委員会文化課

5. 事務局

宮下喜吾 喬木村教育委員会事務長
吉川文人 " 社会教育係長
平栗康弘 " 社会教育係

伊久間原遺跡公園広場 発掘調査報告書

1995. 11

下伊那郡喬木村教育委員会

印刷 飯田市通り町 傑秀文社
